



約束

「友人はみんな天国ですよ。辛い検査や治療はもうたくさん」——85歳になる彼は、自分の病気を悟っていたようだった。長年吸い続けたタバコで、肺は相当やられている。正確には慢性閉塞性肺疾患と呼ばれる病態だが、いつがんが発生しても不思議はない。酸素を取り込んで、二酸化炭素を捨てる機能が損なわれ、痰がらみの咳が重積すると、意識が遠のくほど苦しくなる。気管支を拡げて呼吸を楽にする吸入薬なしにはトイレに行くのも大変だった。

寿命を縮めるからと、口を酸っぱくして禁煙を促すが、一向に聞き入れない。でも、律儀に毎月外来にやってきた。病気の話になると話題をそらし、花の写真を撮りに幾度となく出かけた海外旅行や趣味の園芸、事業にまつわる苦労話、子どもたちのことや再婚した美しい妻のことなど、波乱に満ち満ちた実業家人生をちょっと自慢げに語り、「私の最期は頼んだよ、先生」といって帰ってゆく。

その日は、春一番が吹き荒れ、そろそろ花見だねと世間話をしながら胸のX線写真を撮影した。半年前と比較すると、肺野にうっすら気になる影がある。よほど難しい顔をしてX線写真を見ていたに違いない。「私のがんは、あと1年ですか?」と、冗談めかして問いかけてくる。初期のX線写真では何ともいえないから詳しく検査をしようと必死で説得するが、受け入れる気配はない。

翌月も、翌々月も穏やかな笑顔でやってきた。怪しい影は鮮明化し、がんはほぼ確実となった。家族にも事

実を伝えておかねばならない。「医者立場も考えてくれ」と嫌がる彼を何とか口説き、妻と前妻の子どもたちを来院させた。彼の言動から、うすうす感じ取っていたらしいが、いい出したら誰の助言も聞かない気質を知っていたことだろう。自分で決めたことだから家族としては受け入れたい。いや、受け入れるしかないから、どうかわがままを聞いて面倒を見てくれと、逆に懇願された。

体調が悪いから往診してほしいと連絡を受けたのは、中秋の名月のころだった。夏が終わっても真夏日が続いていた。気丈に振る舞っていたが、声の張りはなくなっていた。明らかに脱水状態だったため点滴をしたが、呼吸苦が強く、とても通院できそうにない。この日から在宅医療が始まった。しっかりと苦しみを取り除くことが重要だ。痛みを我慢せず、くよくよしないで朗らかに過ごす、生命力も免疫力も圧倒的に強くなる。自宅で気ままに過ごした人たちの寿命が長いのはそのためだ。

秋が深まるころには酸素療法が始まった。とてもおしゃれで、自宅でも身なりをきちんと整えていたが、いつの間にかパジャマの日が多くなっていった。寝室の壁には思い出の花の写真が飾られ、窓から見える庭の樹木は葉を落とし始め、冬の訪れを告げていた。往診のたびに、やつれてゆく姿を目の当たりにしたが、静かに老いを受け入れ、自然な姿で旅立つことを誇らしげにしていた。

正月を迎え、眠るように天に召されたのは梅のつぼみが膨らんだ2月だった。家族に別れの言葉を残し、感謝の気持ちを伝えながらの大往生だった。あと1年という彼の予想はなぜか当たっていた。病気を治したわけでもないのに、約束をしっかりと果たすことができた。在宅医療には、人生を支える力があるに違いない。